



日本赤十字看護大学大学院30周年記念事業

おたよりリレー

「おたよりリレー」と題し、修士課程1回生から30回生までの修了生に

院生当時の思い出、現在の活動の様子、母校やこれから大学院進学

を考えている方々へのメッセージをいただきました。



目次

- ・修士課程 1 回生 谷口 好美さん
(金沢大学 医薬保健研究域保健学系 看護科学領域 老年・リハビリテーション看護学 准教授)
- ・修士課程 2 回生 常盤 文枝さん
(埼玉県立大学 保健医療福祉学部看護学科 大学院研究科 教授)
- ・修士課程 3 回生 寶田 穂さん
(武庫川女子大学 看護学部 大学院看護学研究科 精神看護学分野 教授)
- ・修士課程 4 回生 北 素子さん
(東京慈恵会医科大学 医学部看護学科 教授)
- ・修士課程 5 回生 綾部 明江さん
(茨城県立医療大学 保健医療学部看護学科 公衆衛生看護学 准教授)
- ・修士課程 6 回生 榊 由里さん
(京都大学大学院 医学研究科 人間健康科学系専攻先端中核看護科学講座 准教授)
- ・修士課程 7 回生 赤沢 雪路さん
(松岡訪問看護ステーションコスモス 精神看護専門看護師)
- ・修士課程 8 回生 東 めぐみさん
(順天堂大学 保健看護学部成人看護学 教授)
- ・修士課程 9 回生 大谷 則子さん
(国際医療福祉大学 成田看護学部看護学科 教授)
- ・修士課程 10 回生 佐藤 今子さん
(日本大学板橋病院 外来師長 慢性疾患看護専門看護師)

- ・修士課程 11 回生 坂井 志織さん
（淑徳大学 看護栄養学部看護学科 准教授）

- ・修士課程 12 回生 吉田 彩さん
（中京学院大学 看護学部 講師）

- ・修士課程 13 回生 成川 美和さん
（鎌倉女子大学 家政学部家政保健学科 准教授）

- ・修士課程 14 回生・博士後期課程 14 回生 深谷 基裕さん
（愛知医科大学 看護学部母子看護学領域 小児看護学 准教授）

- ・修士課程 15 回生 森 祥子さん
（東海大学 医学部看護学科 准教授）

- ・修士課程 16 回生 腰原 麻衣子さん
（日本赤十字社医療センター がん看護専門看護師）

- ・修士課程 17 回生 鴨川 郁子さん
（公益財団法人がん研究会 有明病院 がん看護専門看護師）

- ・修士課程 18 回生 中島 千春さん
（聖路加国際病院 看護師長 急性・重症患者看護専門看護師）

- ・修士課程 19 回生 内山 孝子さん
（神戸市看護大学 基礎看護学 准教授）

- ・修士課程 20 回生 辻 守栄さん
（千葉県総合救急災害医療センター 急性・重症患者看護専門看護師）

- ・修士課程 21 回生 綾田 美紗姫さん
（国立がん研究センター 特任研究補助員）

- ・修士課程 22 回生 伏見 友里さん
（東海大学 医学部看護学科 助教）

- ・修士課程 23 回生 藤澤 和歌子さん

- ・修士課程 23 回生 高橋 さおりさん
(助産院 SAKURA SALON 代表)
- ・修士課程 24 回生 伊藤 麻紀さん
(日本赤十字社医療センター 看護部 看護師)
- ・修士課程 25 回生 城所 環さん
(日本赤十字広尾訪問看護ステーション 看護師長)
- ・修士課程 26 回生 猪狩 遼子さん
(ミシガン大学)
- ・修士課程 27 回生 今井 真喜さん
(公益社団法人川崎市看護協会立 向丘訪問看護ステーション かわさき訪問看護ステーション
兼務 訪問看護師 在宅看護専門看護師)
- ・修士課程 28 回生 紙屋 千絵さん
(国立成育医療研究センター 外来副看護師長 移行期支援担当)
- ・修士課程 29 回生 小林 寛明さん
(大学院看護学研究科看護学専攻修士課程 看護管理学領域 3年生)
- ・修士課程 30 回生 神田 由佳さん
(大学院看護学研究科看護学専攻修士課程 看護管理学領域 2年生)

所属などは 2023 年当時のものです。



谷口 好美さん(修士課程 1 回生)

金沢大学 医薬保健研究域保健学系 看護科学領域

老年・リハビリテーション看護学 准教授

大学院 30 周年、誠におめでとうございます！30 年前、私は日本赤十字看護大学の修士課程 1 回生でした。現在は、金沢大学で老年看護学の教員です。修士課程で学んだことが、自分にとって大きなターニング・ポイントでした。個人の思い出がお役に立てば光栄です。

まず、1993 年の入試のこともよく覚えています。試験会場の窓に満開の桜がきれいでした。入学は 5 月なので在籍は 1 年 11 カ月と短期間でしたが、それまでの価値観が一新される体験の連続でした。北陸の大学病院の看護師が、大学院に憧れて入学したものの、なかなか成果が出ない、プレゼンテーションや討論がうまくいかない、先生方からの鋭いご指摘に立ち往生するなど、都合よく詳細は忘れても、失敗体験が多かったことは間違いありません。

同級生の方々からは、専門分野や年代も垣根なく接して下さり、ずいぶんと助けていただきました。大学周辺の環境も緑地も多かったので、大学院で熱くなった後は広尾駅までの長い坂道や、有栖川宮記念公園を散策してクールダウンもしていました。入学 3 か月目頃にトンネルを抜けたような、やっていけるかもと、何の根拠もないのですが楽観的になれたことも覚えています。何か困難を乗り越えた瞬間だったのかもしれませんが。

基礎看護学を専攻していたので、樋口康子先生、小玉香津子先生、黒田裕子先生がご指導を下さいました。看護理論家のマーサ・ロジャース、哲学者の田邊元など初耳でしたが、看護と関連付けて教えていただいたことも懐かしいです。直観やエネルギーの場など、当時訳がわからなかったことを、理論の授業で今度は伝える側となり、この頃にジャンルを超えて科学哲学や心理学で多くの書籍に親しんだことが元になっています。専攻以外の先生方も、院生のためであればと、時間を割いて抄読会などでお付き合いもして下さいました。思い出されるのは、1 回生だから受けた恩恵の日々でした。ありがとうございました。



常盤 文枝さん(修士課程 2 回生)

埼玉県立大学

保健医療福祉学部看護学科 大学院研究科 教授

大学院開設 30 周年 感謝を込めて

大学院開設 30 周年、誠におめでとうございます。

私が大学院に進学したきっかけは、学部の恩師の一言でした。大学卒業直前、卒論が思うように書けず気落ちしていた私に、指導教員の中西睦子先生が「今度、大学院ができるから。あなた、戻ってきなさい。」とお声かけくださいました。私が卒業する時は、大学院開設の準備段階でしたので、おそらく、卒業生全員に声掛けくださったのだらうと思いますが、その時の私にとってはまさに光明でした。そして、いつもの私ならばそのまま社会の荒波にもまれて、すっかり受験のことを忘れてしまったかもしれないのですが、幸運にも、大学で英語論文の抄読会を開催してくださり、同じように看護をさらに学びたいという仲間からの刺激も受けて、無事に修士課程に進学することができました。

当時は、旧校舎と旧学生寮の間の小さなプレハブが私たちの研究室でした。2 回生は、多くの人がいったん勤務をやめて学業に専念していましたので、とにかくよく研究室にみなおりました。そして、数人集まれば、答えのない問いについてよく議論をしていました。あの時は、結論を導き出すということよりも、議論そのものを本当に楽しんでいた気がします。

現在、私は自分が育った埼玉県で、看護学の教育・研究にあたっています。私の研究室には、いまでも修士課程の時のノートやメモがたくさん残っています。読み返してみると、今の私には理解できない難解なものも多々ありますが、本当に懐かしく、大切な宝物です。そして自分が大学院生を指導する立場になって、当時の先生方の思いやお考えが少しわかってきたような気がしています。大学院に進学することは、人生においてはまわり道になることもありますが、この体験は確実に現在の私の肥やしになっています。あの時に巡り合えた、すべての先生方や仲間感謝の気持ちをお伝えしたいです。今後も母校の益々のご発展をお祈りいたします。



寶田 穂さん(修士課程3回生)
武庫川女子大学 看護学部
大学院看護学研究科 精神看護学分野 教授

30周年おめでとうございます。

私は、精神保健看護学領域にて、1997年度に修士課程を修了、2007年3月に博士号(論文博士)を授与いただきました。修士修了後は、精神科病院で看護師として勤務し、それ以後は看護系大学で教員をしています。修士課程へは、臨床や教育の場での疑問や困難感から救いをもとめる気持ちで進学しました。修了後に、精神科病院で看護師として勤務しましたが、看護現場での考え方、感じ方が、変化している自分に驚きました。日赤で学んだことで、こんなにも、現象の見方、考え方、感じ方が変わるのかと。

大学院で何を学んだか思い浮かべてみると、おそらく知識はいっぱい得ることができたと思います。しかし、30年近く前の知識が、現在にそのまま通用するわけではありません。覚えるだけの知識では何の役にも立たないのです。おまけに、歳を重ねるとともに、どんどん記憶力は低下し、思いだせない知識が多くなります。では、何を学んだのか。教員との対話、実習先の人たちとの対話、同級生との対話、そういった様々な人との対話を通し、物事の見方、考え方、感じ方等を学んだと思います。特に、精神保健看護学のゼミや、論文の指導を受けるプロセスを通して学んだことが、現在の私自身にとっても大きな影響を与えています。

最も大切な学びは、人が成長できるには、安全感や安心感がとても重要だということです。それは、精神看護においても、本質的なことだと思います。修了後も、看護や看護教育の現場で、何かと困難は多々ありますが、当時の先生方や同級生は、私の心の中で安全で安心できる存在として内在化し、今なお私を支えてくれています。自分が生きる上で、看護に携わる上での核となる部分が養われたのだと思います。心より感謝申し上げます。

今後も、日本赤十字看護大学大学院が、ますます発展されますよう、お祈り申し上げます。



北 素子さん(修士課程 4 回生)

東京慈恵会医科大学

医学部看護学科 教授

大学院開設 30 周年おめでとうございます。

今回このような機会をいただき、改めて学生時代を振り返り、とても懐かしい気持ちでいっぱいになりました。この場を借りて、当時の諸先生方や関係者の皆さま、同級生や諸先輩方に感謝申し上げます。

私は 1996 年春に京都から上京して修士課程に入学し、修了後そのまま博士後期課程に進学、合計 5 年間で在学し、2001 年に博士の学位をいただきました。

私の所属は修士・博士と一貫して成人看護学領域で、黒田裕子先生に師事し、研究者としての核を育てていただきました。修士課程では様々な背景を持ち学ぶ意欲に満ち溢れた 20 人の仲間と 2 年間で共に過ごしました。在学中に体験したすべてが宝物です。

在学中の 5 年間は、まさに「悪戦苦闘の中から知的好奇心とその充足過程にかすかな楽しみと喜びを感じ取り、それをエネルギー源に希望と勇気、情熱をもって学問の世界に果敢に挑戦する」(稲岡, 1998,p.94) ことを学んだ、濃密な時間でした。今でも様々な出来事・場面が鮮明に思い起こされますが、あえてひとつを取り上げるなら、1 年前期で全員が必修履修した樋口康子先生の授業です。一巡目はグループで各自が追及課題としている看護現象についてディスカッションテーマを決めて発表、二巡目は院生同士ペアになって関心のある看護理論を取り上げて看護現象を理論的科学的に考察して発表する、というものでした。みな必死で準備し、発表当日は緊張マックスでしたが、鋭い質問が他の学生から、そしてなによりも緊張を突き破るような鋭い問いかけが樋口先生からあり、ディスカッションが深まっていくという具合です。その時作成した資料、仲間が作成した資料、そしてディスカッションの議事録はすべてファイリングし私の研究室の本棚に大切に保管しています。

現在は教員として院生たちに関わる立場になりましたが、自分が体験した学問に果敢に挑戦し続ける楽しみと喜びを伝えたいと、精進の毎日です。

改めて母校、日本赤十字看護大学大学院の開設 30 周年をお祝いするとともに、今後のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



綾部 明江さん(修士課程 5 回生)

茨城県立医療大学 保健医療学部看護学科

公衆衛生看護学 准教授

私は、看護師としての臨床経験もなく、保健師経験も3年のみという状態で修士課程に入学しました。豊富な臨床経験を積まれた方や、すでに看護教員として働いた経験のある同級生の中で、授業についていっただけでも必死だったことを覚えています。また、研究も、始めは高齢者に関わる他職種の連携について取り組もうとしましたがうまくいかず、結局、介護負担と在宅サービス利用の関連について研究を実施しました。いろいろな意味で先生方にも同級生のみなさんにも教えていただくことの多い2年間でした。

修士の時に悩んだ他職種連携の課題は、時を経ても日本の介護における課題としてまだ続いていると感じています。現在、介護予防事業の評価や、主任介護支援専門員研修として地域援助技術に関する講師をさせていただく機会があります。研修の際には、今でも修士課程の時に悩んだあの時の思いを、参加者と共有していると感じることがあります。

そのような私ですが、現在は茨城県立医療大学の公衆衛生看護学領域に在籍しています。学部・大学院教育や保健師への就職転職支援、県内に在籍する保健師への研修、本学卒業生保健師を中心としたライソングループの運営などを通して、保健師の人材育成に取り組む毎日です。また、東日本大震災で都内に避難した被災者の健康相談や、茨城県内の難病患者さんのグループのスタッフとして運営に参加するなど、保健師の立場から対象者に関わる機会もあります。

現在の主な研究課題は、保健師が行う健康相談の教育手法の開発です。本学では臨床実習前後の学生を対象にOSCEを実施しているのですが、その際保健師としての課題作成を担った経験を基に研究を実施しています。健康相談、家庭訪問、地区組織活動など、公衆衛生看護技術の詳細はまだ解明されていない部分がまだ多くありますが、分析を続けることで、学生や一般の方にも保健師活動が理解しやすい形として提示できればと考えています。



榊 由里さん(修士課程 6 回生)

京都大学大学院 医学研究科

人間健康科学系専攻先端中核看護科学講座 准教授

恵まれた環境で看護を探究できるありがたさ

この度は日本赤十字看護大学大学院 30 周年、誠におめでとうございます。母校がこの節目を迎えられたこと、心よりうれしく思います。

私が入学した 1998 年当時はまだ古い校舎で、健康面とそして節約を兼ねて、渋谷駅から毎日歩いて通っていたことが、懐かしく思い出されます。諸先生方の貴重なご講義を受けアカデミックな雰囲気を感じ銘を受けながら、同期の友と、看護について熱く語り合った日々は、人生の中でもとても大切な時間でした。ちょうど 1999 年から 2000 年に移り変わるときに修士論文も佳境を迎えており、いわゆるコンピューター 2000 年問題で、せっかく集めた研究データが吹っ飛んでしまわないか、ドキドキしながら年を越したことも今ではいい思い出です。

修了後は、修士論文のテーマにもしていた救急看護に携わるべく、臨床の道へ進みました。臨床実践を積み重ねる中で、専門看護師の資格を取得し、無我夢中で日々の看護を実践してきたように思います。その中で、これから看護を担う後進の育成をしてみたいという気持ちが大きくなり、昨年からは大学で教育に携わらせていただいています。臨床が大好きなので、臨床で活動しながら教育にも携わることができる現在の環境で、とても楽しく、さらに看護を探究する日々です。

在学生の皆さま、これから大学院進学を考えている皆さま、大学院では、「まだこんなに知らないことがあるんだ」「こんなに勉強しなければならないことがあるんだ」と、圧倒されることも多いかと思います。でもそれはとても贅沢で、自由で楽しいことだと思います。そして、日本赤十字看護大学大学院は、学生が自由に学べる場を提供してくれる、とてもすばらしい環境が整っていると思います。このような環境で学べたことを、私はとても誇りに思っております。是非この大切な時を楽しんでください。そして同じ看護師の仲間として、共に看護を探究していけたら、とてもうれしく思います。



赤沢 雪路さん(修士課程7回生)
松岡訪問看護ステーションコスモス
精神看護専門看護師
院生時代は私の宝

「赤沢さん、え・い・ご」。大学院入学試験の合否発表の日、私の隣で一緒に発表者の掲示を見て、笑顔で話しかけてきたのは、精神保健看護学の教授、武井麻子先生。

私の英語力のなさを言っているのは明白で、合格してホッとした気持ちが、一瞬で緊張に変わるという、これが私の大学院生活の始まりでした。

その年、領域の修士課程に入学したのは私一人だったため、先生方から出される課題をこなすにも、何をするにも、先輩や他の領域の同輩たちのやり方を何度も見て聞いて、解決の糸口を探さなくてはなりません。この行動がその後の臨床で大いに役立つなど、当時は思ってもいませんでした。

大学院修了から5年後に、横浜市立みなと赤十字病院に就職しました。『総合病院に精神科救急・合併症病棟を開棟する手伝いと、リエゾンナースの役割をしてほしい』というのが、看護部長からの依頼でした。プレ CNS¹としてこれをどう進めていいか、右も左も分からない状況は、かつての大学院時代と同様です。例え他力本願と言われようとも、分からないことは周囲に聞きまくり、CNS や CN²と一緒に患者さんのところに行ってアセスメントする。『御用聞き』と名付けて精神科部長と院内をラウンドし、職員や患者さんの困りごとを聞く。こうした活動が、認知症看護認定看護師、臨床心理士とタッグを組み、うつ(Depression)・せん妄(Delirium)・認知症(Dementia)支援を行う『3D サポートチーム』の結成につながりました。

常に心掛けていたのは、「とにかくしゃべる、話し合う」こと。これは、大学院時代、領域で毎週行っていたデブリーフィング・セッションで教わったことです。自分の体験を洗いざらい話しながらその場に抱えてもらうという機会を2年間ももてたことは、私の宝です。

大学院での学びは、自分の生き方にも影響する貴重な体験になります。英語ですか？今も武井先生におんぶにだっこです。

¹ 専門看護師(CNS)の資格認定前の、いわばCNS候補生。

² 認定看護師。



東 めぐみさん(修士課程 8 回生)

順天堂大学

保健看護学部成人看護学 教授

母港としての大学院 臨床と研究をつなぐ架け橋の基盤を学ぶ

約 10 年間の子育て期間を経て、臨床に戻りました。30 年も前のことです。母校の大学病院で看護師として育った私の地域病院での再スタートですが、「看護ってこんなに面白かったんだ」と思いました。この感覚は 2 回目でした。看護学校時代、コミットできずにいた私は教員から「眠り姫」と呼ばれており、卒業時に教務主任の先生から「期待していたのに・・・」との言葉をいただきました。期待されていたこと、そして期待にこたえられなかったこと・・・心の奥の重荷になりました。卒業後、大学病院では先輩や環境に恵まれ「看護って面白い」と思いました。再就職先で思いがけず、主任に昇格した時、看護を学び直したくなり、看護部長にお願いし、県立大学の教員養成課程で一年間、その後、日本赤十字看護大学修士課程で学びました。修士課程では、初めてのことでばかりで、日本語がわからず右往左往する日々でした。先輩や仲間の力を借り、樋口康子先生の研究室の小さな図書室が憩いの場所でした。徐々に日々の実践から熟練することに関心が向き、患者さんから信頼される看護師は、なぜ、そういう看護実践ができるのか、何が違うのか疑問に思いテーマにつながりました。修士課程をなんとか修了し、河口てる子先生に仲間とご挨拶に伺うと「今日から同じ看護師の仲間だから」との言葉をいただき、嬉しかったことを覚えています。

大学病院に戻ると、良いケアをしているにもかかわらず、やりがいがないと看護師が悩んでいました。どうしたら看護師を支えられるのか、教育担当の私は試行錯誤しリフレクションに出会い、経験から学ぶことに取り組みました。看護を語る会を毎月一回、一回も休むことなく、8 年間取り組みました。この取り組みが博士論文につながりました。

また、2006 年に慢性疾患看護専門看護師の認定を受けました。当時、専門看護師課程ではなかったため、認定を受けるまで 5 年ほどかかったと記憶しています。研究科で学んだことは、専門看護師として臨床での実践と研究をつなぐ架け橋として活動するようになったときに、大いに助けになりました。修了して長い時間が経ちましたが、日本赤十字看護大学大学院は私の母港でもあり、学生として過ごした 2 年間は財産です。年齢を重ね、後進の育成に携わる機会をいただき、北見市にある日本赤十字北海道看護大学で教鞭をとらせていただきました。現在は、家族と離れた生活の限界や家族の健康のことがあり、関東に戻らせていただきましたが、赤十字で培った看護の心と技を伝えていきたいと思っています。

私たち修了生の母港として、今後ますますのご発展を祈念しております。



大谷 則子さん(修士課程 9 回生)

国際医療福祉大学

成田看護学部看護学科 教授

大学院 30 周年に寄せて

この度は、日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。このような節目を迎えられたこと、心より嬉しく思います。

修士課程に入学するきっかけとなったのは、臨床でプリセプターとして新人看護師を指導していたある日、突然プリセプティが退職をしたことでした。彼女に何が起きたのだろう、新人看護師を教育するとはどんなことなのだろう、という疑問符ばかりが頭を渦巻いていたことがきっかけとなりました。大学院時代は、学びたい欲に自身の能力が追いつかず、文献を読み込み、本質を他の学生に伝えるプレゼンもままならず、何度も落ち込んだことを思い出します。霧の中をさまよいつつながら落ち込む私を寛大な心で見守り続け、ときに考え方を導くすべを示してくださった当時の先生方や、専攻は違っても一緒に悩み考えてくれた同級生には感謝するばかりです。

また、修士課程での授業は現在の私自身を形作っているような気がします。修士課程で学んだ複雑系という概念は、私にとってとても新鮮でかつ腑に落ちるものでした。自分が複雑系の中で生きていることを初めて知った時の鮮烈な驚きは今でも覚えています。

修了後は、大学の教員となりました。基礎看護学の教員をしながらも、臨床への関心は薄れることはありません。私の関心は修士課程に入学するきっかけとなったそのころからずっと、臨床で働く看護師にあります。看護師が現場でどのようなことを感じ、考え、経験しているのか、そこにはどのような臨床の知が埋め込まれているのか、記述的に明らかにすることを目指した研究を続けています。

これから大学院へ進学をされる皆さまは、学ぶとはこれほど尊いものなのだと目から鱗が落ちることもあれば、学問の奥深さや難解さに心折れる日もあるかもしれません。しかし、人生の中で自由に学問を探究できる時間があるというのはなんと贅沢なことなのか、と私は今改めて感じます。どうぞ学ぶことをあきらめず、楽しんでください。そしていつの日かともに看護を探究できればと願っています。



佐藤 今子さん(修士課程 10 回生)
日本大学板橋病院
外来師長 慢性疾患看護専門看護師

わたしは 2004 年に成人看護学修士課程を終了し、大学病院の内科混合病棟→院内研修担当者→内科病棟で勤務しました。わたしの大学院入学時には慢性疾患看護専門看護師はまだ設立されておらず、その後働きながら課目履修を母校の多くの先生方のご指導、ご支援の下 10 年かけて行い、2018 年に慢性疾患看護専門看護師を取得致しました。

修士課程を修了後、一番驚いたことはわたしにとって入院している方々の言動や行動、その人を取り巻く環境の情報から対象理解をすることができるようになったことでした。修士課程に入学以前のわたしは呼吸器病棟で勤務していましたが、呼吸困難感やがん性疼痛が緩和できず亡くなる方を目の前に自分がこの方々の最期に関わる看護師として存在しても良いのだろうか、と悩むことも多くありました。そういった自分の感情さえも言葉にできないもどかしさや無力感を感じていました。

修士課程に進学し、様々な領域の看護学や看護研究を学び、ひとつひとつの概念を理解し、研究論文の文献検索のため多くの大学の図書館へ足を運び、海外文献も電子辞書を使用しながら寝食も忘れて勉強することもありました。修了後も臨床で疑問があると文献を検索しては、医師とディスカッションを繰り返し、お互いに納得するまで患者さんについて話し合うための言語を得ることもできました。これらは修士課程で学びを深め経験値だけでなく、根拠に基づいた看護実践が現在の専門看護師としての活動に大きく影響していると実感しております。

現在は糖尿病や腎疾患、膠原病、循環器、呼吸器疾患、慢性疼痛と幅広く慢性疾患の方々の生活者としての視点を持ち看護に携わり、ケアシステム、看護外来の設立と実践などの活動もしております。医師や看護師からの相談が多くありますが、特にわたしは臨床現場の看護の質の向上を目指し相談できるリソースナースとして教育を大切にしています。これからも日本赤十字看護大学大学院の卒業生として誇りと自信と向上心を持ち、日々多くの人々に信頼される質の高い看護実践ができる看護師の育成を努力していきたいと思っています。

稲岡文昭(1998). 貪欲な知的好奇心を.日本赤十字看護大学, 学生便覧 (p.94). 東京



坂井 志織さん(修士課程 11 回生)

淑徳大学

看護栄養学部看護学科 准教授

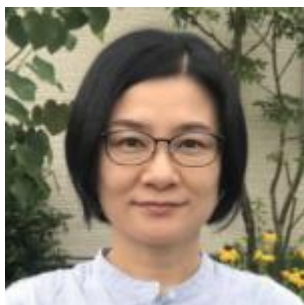
研究者としての基礎を育んだ修士時代

大学院生時代の思い出といえば、やはりディスカッションの熱さ/圧さ/厚さです。私の所属領域では毎週院生の研究についてのゼミが開催されていました。ゼミは毎回2~3時間続き、修士1年の頃は内容の理解ができないながらも、先輩方の研究への熱意にただ圧倒されていました。そして夏には泊りがけのゼミ合宿があり、そこには博士の院生も加わります。議論の内容はさらに難解になり、早朝から夜中まで白熱した議論が続きました。“時間”についての哲学的な議論に触れたのもこの頃が初めてであり、博士の院生の思考の厚さに新たな世界を見せられた感じがしていました。

また、他領域の同級生との議論も授業内外で毎日していました。専門や臨床経験が異なる仲間と話すことはとても刺激的であり、知らなかった世界に触れる楽しさがありました。研究についても自主ゼミなどを開き、互いに意見しあうことの重要性を学びました。博士課程はより専門的な研究方法で取り組みたいと考え他の大学院に進学しましたが、修士時代に様々な先輩方の研究姿勢に触れたこと、また仲間と徹底的に議論する態度が身につけていたことが、博士課程での学際的な学びを可能にしてくれたと考えています。

このような充実した修士・博士課程での学びは大きな財産となり、私の今の活動を支えています。例えば、現象学的方法で取り組んだ博士論文は、2019年に日本看護協会出版会から『しびれている身体で生きる』として出版されました。そして、この書籍がきっかけとなり2022年度の日本看護科学学会の学術集会大会シンポジストとして招かれたり、遠方の都市からも看護師向けの大きな講演を依頼されたりします。研究成果が色んな方々に届いていることを実感し、嬉しさと共に研究者としての責任を再認識する今日この頃です。また、日本看護科学学会の委員会活動を通して、全国の素晴らしい研究者らと知り合うことができ、今でも仲間として交流が続いており知的刺激を得ています。そして、科研費をはじめ外部の競争的研究資金も得ることができ、研究活動にも継続的に取り組んでいます。

大学院への進学は一見すると敷居が高いように思えるかもしれませんが、しかし、新たな思想に触れたり、看護以外の学問分野の研究者と出会えたりすることは、見える世界を広げ人間的成長をもたらします。探究したい事象がある方は、ぜひ大学院で学びあなたの世界を広げてみてください。



吉田 彩さん(修士課程 12 回生)

中京学院大学

看護学部 講師

大学院の皆様にご挨拶を込めて

30 周年おめでとうございます。

大学院について思い返しますと、まず、編入生の頃を思い出します。私が学部に編入した時期は、博士後期課程が創設されて初めての修了生が誕生した頃だったのだと思います。学部の授業の際に先生方が「大学院生が面白い研究をしているのよ」と大学院の様子をお話くださったことを覚えています。また、私の看護学との出会いは樋口康子先生の看護科学論でした。編入生は少人数でしたので、樋口先生と学生が輪になりとてもお近くで、科学とは何か、学問とは何かを考え、看護の学問としての可能性に強く魅かれたことが思いおこされます。

卒業後、呼吸器内科で働く中で、日々苦しい状況で過ごしている患者さんに十分な看護ができないことに悩み修士課程に進みました。守田美奈子先生のゼミでは、合宿で浴衣で語り合ったことがまず思い出されますが、自由に学ぶ喜びと自分に向き合う苦しさの間を行き来する毎日だったように思います。様々な経験をもつ院生の仲間や先生方とフィールドノートを読み合わせ「患者さんのこの言葉の意味は何だろう」などと丁寧に考えることの大切さを学んだことは、現在の研究や教育の基となっていると感じます。

修士課程修了後、母校での教育や緩和ケア病棟での臨床に携わった後に、実家近くで育児をするため岐阜県に引越しました。現在は大学で慢性期看護学の教員をしています。実習では看護学の面白さを学生にどのように伝えればよいか悩みながら、時々大学院での日々を思い出しています。先生方に育てていただいたように、私も学生たちを育てていきたいと思っています。研究では在宅緩和ケアをテーマにしています。在宅ケアの発展は目覚ましいですが、山間部などでは資源に限りがあるという課題も見えてきました。

大学院を離れて久しいですが、現在の私を形作ってくださった先生方をはじめとした大学院の皆様にご挨拶を込めて感謝しております。母校の今後ますますの発展をお祈りしております。



成川 美和さん(修士課程 13 回生)

鎌倉女子大学

家政学部 家政保健学科 准教授

研究者としての基礎を育んだ修士時代

大学院を修了してから早 18 年が経ちました。私の修士時代を思い返すと、最初の 1 年間は旧校舎で 2 年目は新校舎（現在の校舎）で過ごすという、何か 1 つの節目に立ち会えた時だったように思います。また同期生達は、年齢も様々で、色々な看護経験、背景をもつ個性的な集団だったと思います。

授業では、グループで課題を行い、プレゼンをし、白熱したディスカッションをし、仲間の考えに反論したり関心したりと、多くの刺激をいただきました。時にはプレゼンの期日に間に合わず、24 時間では足りない焦り、プレゼン後には先生からご指摘をいただき、自分の浅はかな考えや探究心のなさに、自己嫌悪に陥ったこともありました。

毎週行われるゼミナールでは、川嶋みどり先生が、今日は何をテーマに何をおっしゃるだろうかと目をさらのようにし、耳をダンボにして臨んだことを思い出します。川嶋先生からお教え頂いた事は沢山ありますが、とにかく先生はエネルギッシュで常に複数の仕事を同時進行し、看護への追求心は博士、修士生の誰よりもすごかったと思います。

みんなに向かって話をしている際にも何かひらめくと、「ねえ。これ、やってみよう」と声をかけ、早速に取り組むということもありました。新しいことに挑戦する事や物事に情熱を傾ける事をお示くださいました。そして、人の手が人に与える効果や口から食べる事の尊さやすばらしさ等、看護の原点をお教えいただきました。

修士の 2 年間は、新たな知識、考えを深められた 2 年間であり、課題や修士論文に悩まされた 2 年間でもありました。しかし、それを乗り越えた先には、それまでには見えなかった光景に出会えました。あんなにも充実した濃い時間を過ごした事はありませんでした。大学院での出会いや学びがあったから、今日の私があるのだと思います。

最後になりましたが、看護のすばらしさを学ばせてくださった日本赤十字看護大学院に感謝すると共に、これからの益々のご発展を応援しております。



深谷 基裕さん(修士課程 14 回生・博士後期課程 14 回生)

愛知医科大学 看護学部母子看護学領域(小児看護学)

准教授

大学 30 周年に寄せて

私は看護系大学を卒業後、小児専門病院の NICU で働いていました。病棟業務に慣れ、臨床 4 年目くらいから、子どもへの看護について迷い、戸惑いを感じるが増えていきました。感性と慣性のバランスが崩れていき、特に NICU に長期入院し退院のめども立たない子どもたちとその家族との関わりから「看護」とは何か、もう一度立ち止まって考えたいと思い、進学しました。

大学院入学後、小児看護学の講義やゼミに参加し文献を読みこんでまとめ、プレゼンテーションすることを繰り返し行いました。それまで読んだことがない理論や専門書の翻訳本などは日本語なのに、その中身が理解できずに呆然としたことが何度もありました。英語は勿論日本語の本もその読み方から学び直し、何とか発表資料を作り、原稿を読み上げて発表をしていました。しかし、指導教授から「それはプレゼンテーションではない」と指摘され、やり直したことが複数回あります。抽象的な説明で分かりにくいという指摘が途中からわかったのですが、その当時はプレゼンテーションの仕方も分からず大変なところに入ってしまったと後悔したことがあります。先生方、同期の院生や先輩方に支援してもらいながら、プレゼンテーションのコツをつかみ、新たな知識や技術の引き出しができ、視野が広がり、臨床での出来事を今までと違う視点で解釈することができるようになりました。

修士、博士後期課程では、喘息をもつ子どもたちの体験を理解するため、救急病院、小児科クリニックでフィールドワークを行い、子ども、その家族そして医療者の声を現場で聞き、記録し、まとめていきました。振り返ると大学院の 5 年間は、臨床から離れて地に足をついて立ち止まって 1 つの研究に没頭できた贅沢な時間だったと思います。

私は大学院修了後、小児看護専門看護師になり 7 年間活動しました。現在は看護系大学で小児看護学を教えています。厳しいなかにも、子どもの最善の利益を考えた先生方の指導をもとに、目の前の学部学生の教育に関わっています。先生方をはじめ大学院でお世話になったすべての方との出会いや交流が、現在の私の拠りどころとなっていることに、あらためて感謝申し上げます。

母校のますますのご発展を心よりお祈りしております。



森 祥子さん(修士課程 15 回生)

東海大学

医学部看護学科 准教授

大学院開設 30 周年によせて

大学院開設 30 周年、おめでとうございます。

私は、大学院に進学する前に、母校の助手をしていました。その中で、看護をより深く探求したいという思いや、このままではいけない、という焦りに似たような気持ちが募り、進学を決めました。

大学院では、文献を読み込み、プレゼンテーションをする、といった過程を繰り返しながら、自身の理解が追いつかないもどかしさや、考えを整理して言語化することの困難さを痛感しながらも、新たな知識を吸収して視野を広げる楽しさを実感しました。とりわけ、所属領域のゼミにおいて、同期の院生や先輩方、先生方とディスカッションしながら、インタビューの逐語録やフィールドノーツを読み解く営みは新たな発見の連続で、とても刺激的でした。それでもやはり、研究を遂行する上での苦労は相当あり、研究計画の段階から何度も、先が見えないトンネルに迷い込んだような思いになりました。しかし、そのたびに、先生方のご助言に支えられ、前に進むことができました。

夏休みに温泉旅館で開催されたゼミの合宿では、卓球大会やカラオケ、深夜まで続いた諸先輩方との語らいの時間を満喫したことも、とても懐かしい思い出です。懐かしいものとして、もう一つ印象に残っているのは、図書館です。膨大な書物が収められている静かなその空間に立ち入ると、目には見えない知識の重みを感じ、背筋が伸びるような気持ちになりました。それと同時に、勇気づけられ、もう少し頑張ってみようと、気持ちを立て直すこともできる、何物にも代えがたい貴重な場所でした。

現在、私は看護学科で基礎看護学の教員をしています。折にふれ、学生の考えを尊重しながら、一人ひとりと向き合ってくださいました先生方を思い出し、そのように在りたいという思いで日々を過ごしています。先生方をはじめ大学院でお世話になった皆さま方との出会いや交流のすべてが、現在の私の拠りどころとなっていることに、あらためて感謝申し上げます。

母校のますますのご発展を心よりお祈りしております。



腰原 麻衣子さん(修士課程 16 回生)

日本赤十字社医療センター

がん看護専門看護師

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私が大学院に進学したのは、緩和ケア病棟で看護の楽しさややりがいを実感したことや、後輩とのコミュニケーションに行き詰まりを感じていたこと、当時の職場の上司が進学を勧めてくれたことがきっかけでした。

最初は基礎看護学の専攻でしたが、当時教授だった守田美奈子先生から今後のキャリアを見据えたコース選択を考える機会をいただき、がん看護学に専攻変更し、がん看護専門看護師を目指す学びが始められました。

大学院では看護だけでなく、今まで知らなかった分野の知識や世界にも多く触れ、さらに、様々な領域の同期生や先輩、先生方との交流を通して感性が刺激される経験をたくさんしました。ですが、大学院の思い出を一言で表すと、「とにかく苦しかった」に尽きます。自分の思考を言語化することがなかなかできず、専門看護師を見据えた実習でも思考の混乱を極め、ひたすら暗闇の中を彷徨っているような感覚で毎日を過ごしていました。無事に修了できたのは、仲間や先輩、先生方の励ましと支えがあったからこそで、今でも感謝しかありません。

大学院修了後は元の病院に戻り、医療相談や退院支援を担う部門に配属されました。他部門・他職種・他施設のスタッフとのやりとりや相談を受ける機会が格段に増え、最初はかなり戸惑いましたが、“思い込みを手放し、幅広い視点で物事を考える”ことをはじめとした大学院での学びが要所所で役に立ちました。修了から 1 年半後のがん看護専門看護師の資格を取得し、現在は緩和ケアチームの専従看護師として従事しています。

大学院での学びは探求がベースなので、学びの深さは計り知れず、見える世界は広がり、確実に自己の成長につながるものがあると思います。専門看護師としての活動は困難や苦悩が日常茶飯事ですが、苦しさも含めた大学院での経験は、今もなお、私の糧となっています。



鴨川 郁子さん(修士課程 17 回生)
公益財団法人がん研究会 有明病院
がん看護専門看護師
大学院 30 周年に寄せて

私が大学院へ進学するきっかけは一人の患者様の言葉でした。その方は、「いろんな学問があって、いろいろな疾患があるけど、なぜ『がん』だけが『がん看護学』なんですか。」と言われました。私は、その時に「がん看護学」について話すことができませんでした。このことがきっかけで、大学院進学を目指しました。

オープンキャンパスで院生室を見学した時、各領域のゼミ室ではなく、そこで学ぶ修士生が一つの部屋で過ごしていることに驚きと同時に「ここで学びたい」と思いました。いざ入学し院生室を見渡し、先日まで病院で業務していた時との景色との違いに「世の中、こんなに勉強している人がいるだなぁ」と思ったことを思い出します。そして、授業が始まると指定された本を読もうとするも、その内容が理解できず「日本語がわからない」状態で、辞書を片手に読み進めました。最初の授業で「知の構築」の本をそれぞれのグループで担当しましたが、なかなか「チ」と言われても「血」ばかりが頭に浮かんでしまい、「チ」と言われて「知」が最初に頭に浮かぶようになるまでには少し時間を要したことを思い出します。また、先生方から「患者さんとの現場経験は宝」との言葉に救われ、自分の中にもこれまでの経験という『宝物』があると思え少し自信が持てたことを思い出します。

現在の職場へ就職し、たくさんのがん看護専門看護師の先輩方に出会い、いろいろな刺激やチャンスのお場を頂きました。私は、とにかく頂いた仕事に向き合い続け、がん専門看護師を取得することもでき、気が付けば入職して 13 年目を迎えました。この間もいろいろな患者様に出会い『宝物』は増え続け、仲間もたくさんできました。

ただ、私の中でいまだに学生として長いフィールドに出ているように感じる場合があります。それは 3.11 の震災があり卒業式がありませんでした。そのため、院生の仲間や先生にこの経験を語りたいと、ふと思うことがあります。



中島 千春さん(修士課程 18 回生)
聖路加国際病院
看護師長 急性・重症患者看護専門看護師
大学院 30 周年に寄せて

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私が、在籍したのは開設 30 年のうちの 2 年間でしたが、その修士課程 2 年間は、臨床からいったん離れ、看護を学び直すことへの楽しさを日々感じ、とても充実した毎日でした。多領域の学生と授業の課題について話し合い、議論し、臨床経験や専攻分野が違う仲間とのこうした関わりは、違う観点からの思考を学ぶとても刺激的なものでした。修士論文作成に際しては、慢性看護学専攻の学生と急性看護学専攻の学生と一緒にゼミを行い、研究テーマ・研究目的・研究方法について学生主体でプレゼンテーションをし、先生方より丁寧な指導を受け、それをまた修正し、といったことを繰り返しました。修士論文作成は、“目的地の見えない砂漠を、一人歩いているような気持ち”にもなりましたが、自身の研究のテーマと収集したデータと向き合う時間は、なんとも言えないかけがえのない物だったと今も感じています。

文献を読み・考え、皆でディスカッションをし、プレゼンテーションのため要点をわかりやすくまとめ発表する。これは、臨床での現象を俯瞰的にみて、何が問題であり、どのような支援が必要か、それを皆でどう患者・家族へ関わっていくかという看護ケアを考ええる思考過程にとっても役立っています。修士課程の 2 年間は、卒業してからの、私の臨床での看護の礎になりました。

日本赤十字看護大学大学院の今後ますますのご発展を祈念しております。



内山 孝子さん(修士課程 19 回生)

神戸市看護大学

基礎看護学 准教授

大学院 30 周年に寄せて

看護管理実践をする中で、看護管理実践の言語化と認定看護管理者を目指し、東日本大震災があった 2011 年に、修士課程看護管理学領域に入学しました。修士課程では 7 人の同期に恵まれ、看護管理について日々、濃厚なディスカッションを繰り返したことや沢山のおしゃべりは楽しいものでした。実践コースであった私は 2 年次には職場に戻って、研究課題のデータを収集し修士論文に取り組みました。看護管理者として「看護とは何か」の問いに、自分の言葉で明快に言語化できない自分に気づきました。自分の言葉で看護の定義ができなければ、看護管理者とはいえないと考えた私は、その問いの答えを見出す糸口は看護倫理にあると考え、続けて博士後期課程で学びたいと高田早苗先生（基礎看護学）に相談させていただきました。

博士後期課程では、これまでクリティカルケア領域で患者の生命と向き合ってきた経験から、医療の枠でしか看護を考えることができていなかったことに気づきました。このことから生活の場に視野を広げ、特別養護老人ホームにおける看取りケアのフィールドワークに取り組みました。これまでの価値観を一度棚上げして、目の前の事象をそのままデータ化することは簡単なことではありませんでした。苦勞をして書き上げたフィールドノーツをゼミに持参すると、高田先生と川原先生は、まるでその場に一緒に居たかのようにその事象のもつ意味が読み解けるよう指導してくださいました。フィールドで当たり前に行われているケアから、看護師がなすべきことは対象者の日常生活を何事も起こらないように整えることで、その人らしさが保たれ人間的な生活を支援することができる、その人の持てる力を見出し信じその力を損なわないようにすることこそが看護の使命であると確信を持つことができました。先生方のご指導に感謝しております。

現在は、この学びを、これから看護を担う初学者に伝えていきたいと奮闘中です。改めて、日本赤十字看護大学大学院の開設 30 周年をお祝いするとともに、今後のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



辻 守栄さん(修士課程 20 回生)
千葉県総合救急災害医療センター
急性・重症患者看護専門看護師

大学院で得たもの

大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私は看護教員を目指して大学院を受験しましたが本庄先生の面談時の一言で CNS の道歩むことになりました。

大学院生活の 2 年間は、ゼミや授業、研究を通して看護とは何か、今まで実践してきた看護の意味を考え続けるとても充実した時間でした。全領域の学生が集まる院生室は、領域の垣根を越えて交流がとても盛んでした。多領域の学生との授業テーマに関するディスカッションや研究のピアレビューは自身の視野が広がるとともに、今までの看護観を見つめ直し、深める機会となりました。

修士論文作成時は、研究テーマに沿って結果をわかりやすく言語化することができず迷走する日々が続きました。本庄先生は、学生がリラックスできるようハーブティを準備して研究室に迎え入れてくださり、学生が気づきを得て次に進めるよう何度も丁寧に指導してくださいました。

修了後、寝かし過ぎた修士論文を投稿した時には、多くの査読コメントをいただき、途方に暮れ諦めかけそうになりましたが、卒業後も本庄先生、三浦先生にアドバイスをいただきアクセプトにたどり着くことができました。ICU 看護師の看護実践を参与観察した経験と ICU 看護の意義を見いだせたことは、私にとって貴重な財産となり今でも臨床実践での糧となっています。

2017 年には本庄先生、三浦先生のご支援のもと日赤 CCNS（急性・重症患者看護専門看護師）事例検討会を立ち上げました。事例検討会では CCNS だけでなく慢性疾患看護 CNS、教員、卒業生、在学中の院生も参加され、臨床での CNS の困難事例について熱い討論が展開されています。事例検討会では、後輩の専門看護師認定審査に向けた支援も行っており、毎年 12 月には、合格の報告を受け仲間が増えいく喜びを感じています。



綾田 美紗姫さん(修士課程 21 回生)

国立がん研究センター

特任研究補助員

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

現在、フリーランスナース（コエノト）として活動し、日々いろんな看護の現場に身を起き、様々な患者さん、利用者さん、現場の方々の語りを集め回っています。

私の研究者として道のはじまりこそが本学でした。進学に至るまでも少し変わったキャリアを積んでいました。臨床に疲れ、看護に疲れ、それでも嫌いにもなれず。コンサルタントという立場で医療の現場を俯瞰しながら、いつのまにか看護を熱く語っていたりする。「今改めて看護と向き合いたい」と思う日々でした。親友の進学を契機に、「看護倫理」を研究したく当時の学長でいらっしゃった高田早苗先生に師事しました。

修士の2年間は、本当に大変でしたが充実した日々でした。

当時、図書担当をされていた谷津裕子先生のもと、TBC 活動（図書館ビューティクラブ）を立ち上げ大いに盛り上がり、バイトを入れすぎてゼミの日程がきめられなかったり、授業を取りすぎてゼミの用意が間に合わなかったり……「あなた！何しにここに来たの！」と、高田先生になんぞ呆れられ怒られたことか……本当に充実した日々でした（笑）

吐きそうになるほど読み、白髪が増えるほど考え、人生最大の貧血（Hb5.6）になるほど心を遣い、いっぱい書いていっぱい修正して、ただ「探究」だけに没頭できたその2年間の、なんと豊潤な時間だったのだろうと、心からそう思います。

未熟でいたらないことばかりの私を、静かに穏やかに温かく導いてくださった川原由佳里先生が、修士の時間を振り返って表現した「豊潤の時」は、先生がお好きなワインのように、まさに時間を経るごとにその意味が際立ってきたように感じています。

未だ道半ばですが、その始まりを多くの良き師に恵まれ、充実した図書館と個性的な仲間とともに過ごせたこと、本当に心より感謝しております。

今後も母校の益々のご発展を祈念しております。



伏見 友里さん(修士課程 22 回生)

東海大学

医学部看護学科 助教

大学院 30 周年に寄せて

私は、精神保健看護学領域にて、2016 年度に修士課程を修了致しました。修士修了後は、精神科病院で看護師として勤務し、精神看護専門看護師を取得しました。精神看護専門看護師を取得後は訪問看護ステーションで勤務し、現在は精神看護学の教員をしています。

私が修士課程へ進学をするきっかけとなったのは、看護師として患者さんと接する中で、自分の中で沸き起こる感情をコントロールできず、また日々の業務で追われてしまい、患者さんと向き合えていない自分がいると感じたことでした。看護師である私と患者さんとの中でどんなことが起きているのか、私の中の感情を見つめ直したいという思いで修士課程への進学を決めました。

修士課程では、毎日、帰りの電車の時間を気にしながら、院生室で修士論文をまとめたり、同期の友や先輩と多くのことを語り合っていたりしていたことを思い出されます。毎週、フィールドワークへ行き、週 1 回で行われる精神保健看護学領域のゼミでは、自分自身に向き合う機会となったと思います。私に修士課程へと進学するきっかけをつくってくれた患者さんとは、訪問看護ステーションへ異動してから、私が担当訪問看護師となり再会しました。再会した時に、修士課程に進学する前の自分と修了した自分では、患者さんへの感じ方や対象理解が大きく変化していました。このように私が成長できたのは、授業で多くの知識を得ることができたこと、そしてフィールドワーク、精神保健看護学領域のゼミでの先生方やゼミの仲間との対話だと思っています。その時は、とても苦しかったこともありましたが、たくさん自分に向き合うことができたことは、とても貴重な時間だったと思います。現在、私は大学で教育に携わらせていただいておりますが、臨床に関わっていたいという思いがあり、今も訪問看護ステーションで活動させていただいております。このように臨床や看護教育に向き合い続けることができるのも先生方やゼミの仲間との時間が、私の心の支えとなっているからだと思っています。本当にありがとうございました。

今後も、日本赤十字看護大学大学院が、ますます発展されますように、お祈り申し上げます。



藤澤 和歌子さん(修士課程 23 回生)

大学院 30 周年に寄せて

病棟で勤務していた頃、当時は中間看護師として、リーダー業務に携わったり、学会発表や新人指導の役割を担っていました。看護師としての成長を感じつつも、日々の看護が業務として行っている感覚があり、徐々にケアの意味が見出せなくなっていることに気付きました。「看護とは何か」もう一度考え直したいと思い、看護学部に入部した後、修士課程に進学しました。修士課程では、年代も経歴も様々な院生の仲間と出会い、共に切磋琢磨して学び合うことができました。看護理論の授業では、看護理論家のクリティークを通し、看護の捉え方の新たな視点を身に付けることができました。看護倫理の授業では、事例を通し、臨床現場で日常的に起きるような倫理的な問題に関して、考察を深めていきました。講義やディスカッションを通し、学べることの喜びを感じるとともに、自分の知識や表現力の足りなさに向き合う日々でした。

修士課程修了後は、博士後期課程に進学しました。博士後期課程では、さらに自分と向き合う時間が増え、自分の視野の狭さに落ち込んだこともありましたが、フィールドワークを通し、臨床とは異なった立場から患者さんの声を聴くことができ、研究の楽しさを実感することができました。途中、出産・育児を経て、修了できるのだろうかと不安を感じることもありましたが、先生方の温かいご指導のもと、今年の 3 月に博士後期課程を修了することができました。中堅看護師の頃、一時は離職を考えていた自分が、博士後期課程を修了できたことは奇跡のようにも思えます。これもひとえにご指導くださった先生方、また苦楽を共にした同期生の皆様のおかげと大変感謝しております。大学院での学びを糧に、これからは、看護師を目指す学生やすでに臨床現場で働いている看護師の方々に、研究を通して、看護の楽しさを伝えられるように精進していきたいと思っております。

これからも大学院時代で学んだ様々な知識、研究を通して学んだ ICU 看護の意義、大学院で培った人とのつながりを大切にしながらクリティカルケア領域でよりよい看護が提供できるよう研鑽していきたいと思っております。



高橋 さおりさん(修士課程 23 回生)
助産院 SAKURA SALON 代表

大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私は看護師の時、いつか大学院で研究したいけれど、何を専攻にするか悩んでいました。当時、ターミナルの方をお送りすることが多く、家族のように関わるけれど、医療者ゆえに家族のように悲嘆の過程は辿れない現状と、お亡くなりになられた患者さんやご家族に会いたくなったり、会えない寂しさを感じることもありました。

これからの看護師人生を考えた時に、闘病を支える専門家になるよりも、出産後もお子さんの成長を見守りながら長く関わり、家族看護を探求する助産を専攻しようと考え、助産師になることを決めました。

助産師資格の取得と研究を並行できる大学は他にもありましたが、他大学では「二兎を追うものは一兎も得ず」と後ろ向きな言葉をかけられることもありました。母校の教授からは「来年、大学院で研究する自分と臨床にいる自分、どちらがワクワクする？」と聞かれ、自分の探究心を肯定し、夢を応援してくれる環境に身を置く方が自分は飛躍できると確信し、母校に決めました。

院生時代は、成長痛の連続でしたが、豊富な経験と高い志を持つ同志とディスカッションしながら研究に没頭できた時間は、人生の宝物です。修了後は総合周産期母子医療センターに勤務し、看護師の経験も生かしながら、合併妊娠や産科救急のケアに努めました。

夫の転勤でアメリカ移住し、現地では妊娠産後の相談会や訪問をしていましたが、昨春に帰国し、世田谷区で出張とオンライン専門の助産院を開業しました。どこに移り住んでも継続して母子をサポートできる土台づくりに励んでいます。

海外移住や出産、臨床から地域での活動、オンラインサポートなど、様々な経験をしたことで自分の視野が格段に広がりました。これからも出会う方々を大切にしながら、看護を探求していきます。

教員の皆様、高い志を持ち熱く議論した同志に深く感謝の意を申し上げます。

日本赤十字看護大学大学院の今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



伊藤 麻紀さん(修士課程 24 回生)
日本赤十字社医療センター 看護部
看護部 看護師
大学院 30 周年に寄せて

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年、おめでとうございます。

私は、認定看護師を 10 年以上経験したのちに大学院へ進学しました。同じ領域の同期は全員が認定看護師で、非常に学びやすい環境で 2 年間過ごすことができました。講義やゼミだけでなく、他の領域に在籍する院生とともに理論や事例において「すとん」と心の中で音がするまでとことん議論した時間は非常に有意義でした。また、大学院生全員が同じ院生室を使用しているため、多くの院生と意見交換でき、視野が広がりさらに学びが深める環境でした。

在学中は勤務も継続していました。大学院で学んだことが臨床現場で目の前に現れることが多く、自分の視野や思考が変わって学んでいる変化のプロセスを経験することができました。決して両立は楽ではありませんでしたが、そのつらさがあったからこそ、今、新しいことや必要な変化にチャレンジすることができ、環境から変化させていく楽しさを毎日実感しています。

修了後、専門看護師を取得し 1 回目の更新をした現在は、臨床倫理委員会や慢性看護外来、創傷ケア外来等で疾病や障がい、創傷をもちながら生活する人々に早期に関わり、疾病受容や老いとともに生きることの変化、慢性疾患の終末期の難しさを実感しています。また、特定行為も修了し、病いの経験を患者から学びながら患者によりよいケアを届けることを忘れずに看護実践を行っています。理論通りにはいかず悩むことも多いですが、それが臨床にいる面白さであると思います。近くに大学があるため、大学の先生方からも折に触れて学ぶ機会をいただき、研究なども相談できるサポートもいただけています。看護職の生涯教育がうたわれる昨今ですが、母校からの刺激は患者へのケアを充実させ、再び学びたくなるサイクルを回し続けることにつながっています。



城所 環さん(修士課程 25 回生)
日本赤十字広尾訪問看護ステーション
看護師長
大学院 30 周年に寄せて

日本赤十字看護大学大学院 30 周年おめでとうございます。

私は、暮らしの場でどのように看護が展開され継続されてゆくのか、生活する人々の健康を支える仕組み、専門職同士の連携について知りたいと思い、大学院では地域看護学を専攻しました。考えがまとまらない、定まらない、先生の問いに答えられない、堂々巡りだった研究の過程を石田千絵先生、吉川悦子先生に最後まで見守って導いていただき修了することができました。

大学院は、臨床を離れ看護と向き合う機会が得られただけでなく、様々な分野の情報や知識にも触れることができ、またゼミを通したくさんの仲間と知り合うことができました。気軽にたわいのない雑談から看護理論や倫理観にまで話が広がり、本当に様々な話題で話は尽きることがなかったことが思い出されます。看護以外の本や文献を読む機会になり、視野や考え方の広がりを実感できました。時流の言い方をすれば「ととのう」という感覚でしょうか。そして博士課程の先輩方との合同ゼミでは、これまでの知見や研究手法の選択など、研究プロセスを学べた有意義な時間だったこと、しかしその半面緊張感も高かったことを今でも覚えています。講義のない時期は、認知症カフェ、福祉、老健など施設体験、訪問看護師に同行するなど今までに経験のないフィールドに行く機会を作りました。大学院では、自分でどのように学びを広げていくか、型に嵌めない自由さがあり自分に合っていたように思います。

現在、私は訪問看護の実践者として経験豊かなスタッフと共に自転車で駆け巡る日々を送っています。地域で暮らす人々の心身の健康について看護の目線で考え、障害や疾病がありながらもずっと居たい場所で生きることを支えられる看護があることを実感しています。



猪狩 遼子さん(修士課程 26 回生)

ミシガン大学

日本赤十字看護大学大学院の開設 30 周年を心よりお祝い申し上げます。

私が修士過程に進学したのは、病院内外で携わってきた災害看護実践の災害フェーズや対象のフィールドが限定的で、より広く専門的な視野を拡大する必要性を感じたことが始まりでした。

大学院の授業では、文献や公的文書から理論や制度を学び、理解したことを言語化し、教員や同期との議論を通じてまだまだ理解が不十分であることに気づく、その繰り返しでした。正しい言葉で論理的に伝えることの難しさに、何度も打ちのめされたことを覚えています。また、視野を広げるという点で特筆すべきは、国内外の地域防災実習です。地域防災における官民学の連携の実際について学び、国内外で地域防災に貢献する日本赤十字社の存在の大きさと、災害看護のスペシャリストである教員陣のリーダーシップを目の当たりにし、対象のおかれている状況や文化的背景の理解と尊重が重要であることを学びました。さらに、専門科目のほか看護政策や医療経済学、情報科学の受講を通じ、専門職として多角的な視点から事象を理解し、課題解決に向け検討する視点を養うことができました。

修士課程修了後は病院勤務に復職し、COVID-19 のパンデミックによる混沌とした状況で、倫理的課題を含むさまざまな困難に直面しました。修士課程の 2 年間で学んだ理論的基盤を日々の中に具現化できるよう努めることが、大きな助けとなったと感じています。また、現在はアメリカミシガン大学看護学部の研究補助員として、高齢者を対象とした災害看護領域の研究プロジェクトに携わっています。アメリカの医療保険制度や人口構造は日本とは異なるため、日本の状況と比較しながら研究課題に取り組む中で、これまでにない視点を得る毎日です。

大学院で学んだことの全ては、私の看護師としての成長や人間的な深化に不可欠なものとなっています。いつも粘り強く指導して下さった教員の皆様、時間を忘れ、ともに議論した同期をはじめとする皆様方に対し、深く感謝の意を申し上げます。

日本赤十字看護大学大学院の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。



今井 真喜さん(修士課程 27 回生)
公益社団法人川崎市看護協会立
向丘訪問看護ステーション かわさき訪問看護ステーション
兼務 訪問看護師 在宅看護専門看護師
大学院 30 周年に寄せて

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私が大学院に進学した 2020 年は COVID-19 にて世界が揺れ動いた年でした。大学院入試は 2019 年の 8 月。合格通知が来た時は大変うれしかったことを覚えています。しかし、退職する 2 か月前は COVID-19 アウトブレイクにてその対応に追われ、後ろ髪を引かれる思いで退職し大学院生活がスタートしました。

4 月には緊急事態宣言が発出され、当時小学 2 年と年長の息子たちは学校や保育園に通えなくなりました。小学校からは自己学習のプリントが大量に届き、丸つけまでが親の役割となりました。じっとしていられない時期でも外で遊べない息子たちを抱えながらの大学院生活は厳しい状況でした。修士 1 年の夏、学業の時間を更に確保しなければと思い、家事の分担や睡眠時間の調整など、育児時間はきちんと確保しつつ 2 年で卒業できるよう夫婦で話し合い、走り続けました。子育てと学業の両立に翻弄していたので、学位授与式を終えた後もゴールを切った感覚はなく、急に終わりが来たようなそんな不思議な感覚でした。

大学院での学びを一言で表すと「視野が広がった」ということです。私自身はプライベートでは小学校や子ども会との関りがありますが、昨今ではこども会や PTA 活動などの任意活動は嫌煙されがちで、私自身も看護師の仕事とは別物という感覚でした。しかし、そのような地域活動も在宅看護における様々な課題に立ち向かっていくためには必要なリソースになっていくことに気づかされました。そのような視点から区 PTA 役員としても活動し、その中で地域教育の大切さや重要さを知ることができ、福祉・医療と共通している課題や対策があると思に至りました。例えば、地域の災害やコミュニティにおける取組は訪問看護の領域においては非常に重要なものばかりです。このように普段の地域活動に意味づけて参加し訪問看護の役割とは何かといった視点を持てることが私にとっては大きな学びになりました。

2020 年以降の学業は、大学側もオンライン授業の導入など先生方をはじめ大学関係者の方々のご苦労があったと思います。私たちの学びを継続していくために様々な形で尽力していただき本当にありがとうございました。また、子育てへのご理解とサポートもありがとうございました。改めて感謝申し上げるとともに、益々のご発展をお祈り申し上げます。



紙屋 千絵さん(修士課程 28 回生)

国立成育医療研究センター

外来副看護師長(移行期支援担当)

大学院30周年によせて

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

私は 2021 年 3 月に看護教育学領域を修了しました。修了後は勤務している国立成育医療研究センターに戻り乳幼児病棟を経て現在移行期支援外来を担当しています。

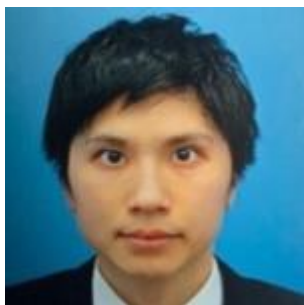
私の大学院での学びのきっかけは、偶然参加した大学院説明会での先生の一言でした。「大学院で学んだあとにみえる臨床の世界は、これまでみえていた世界とは異なるものが見えるはずです」。聞いた直後は何がみえるのだろうか・・・と思いつつ、その一言が心の中に残っていました。

当時看護部の専従教育担当副看護師長として院内教育に関わる仕事をしていました。スタッフから新人教育や指導について相談を受ける中で、私自身が経験に加えてさまざまな学習理論やスキルにつながる考え方をより深く勉強する必要があるのではないかと感じていました。日に日に、「学びたい」という思いが強くなり大学院進学を決めました。受験方法として個別入学資格審査等多様な受験方法があったことや自施設に研究休職制度があった事も進学を後押ししてくれました。

院生生活を振り返ると、学年を越えて、領域を超えて仲間と語り合った豊かな時間を思い出します。「成人学習者」、「リフレクション」、「状況に埋め込まれた学習」等についての学びは、現在臨床現場で活用する基盤の理論、スキルの一つになっています。

さて大学院を修了し 3 年が経過しようとしています。大学院修了後にみえる臨床の世界はより広がり、さまざまな側面からみるように意識が変わりました。

学ぶ楽しさに改めて気づかせてくださった大学院で出会った全ての皆様に感謝すると共に、これからの益々のご発展を応援しております。



小林 寛明さん(修士課程 29 回生)

大学院看護学研究科看護学専攻修士課程

看護管理学領域 3 年生

大学院の進学を考えたのは、2021 年の COVID-19 の流行の時でした。看護師として臨床現場で働く中で、将来に対する漠然とした不安から、今後のキャリアについて検討しました。検討した結果、臨床現場の看護実践の質に大きく影響する看護管理者を目指したいと考えました。そこで、看護管理領域のある大学院を調べ、日本赤十字看護大学の環境の下（人道の理念、様々な分野での研究実績、実習病院、先駆的な活動をされている先生など）で学びたいと思い、入学を決めました。

日本赤十字大学への入学後は、主に看護管理領域と看護教育領域の授業を専攻し、様々な領域の学生と学びました。授業外でも大学院生室内で興味を持った内容を討論する機会もあり、領域に関係なく風通しの良い文化がありました。交流を通して、価値観の多様性を知り、様々な視座から看護を探求することも出来ました。さらに、看護管理領域の方々と 2022 年と 2023 年の看護科学学会へ参加し、発表出来たことは自信に繋がりました。

日本赤十字看護大学へ入学して良かったことは、①組織や領域の枠を超えて志を共にする仲間に出会えた事、②CNS 課程や助産師課程の学生、スウェーデンの学生との授業内外での交流の機会があった事、③働きながら大学院に通える環境があり、臨床での疑問を明らかに出来た事、④様々な先生からご指導を頂き、成長できる機会を与えてくれた事でした。特に、安部陽子先生と古川祐子先生から何事もチャレンジし、粘り強く進むことの大事さを教えて頂きました。

現在は、安部陽子先生の下で同級生と切磋琢磨し、2024 年 3 月の卒業に向けて修士論文を執筆中です。ここでの 3 年間の経験と思い出を大切に、卒業後も日々努力を続けていきたいと考えています。日本赤十字看護大学大学院の開設 30 周年をお祝いするとともに、今後のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



神田 由佳さん(修士課程 30 回生)
大学院看護学研究科看護学専攻修士課程
看護管理学領域 2 年生
大学院30周年によせて

日本赤十字看護大学大学院開設 30 周年おめでとうございます。

現在看護管理学領域修士 2 年生として在学中です。私は、勉強に集中できるよう退職の道を選びました。自由な時間ができたからには、多くの学びを得られるよう邁進するしかありません。管理学領域だけではなく、教育学や災害看護学などの他領域、また倫理や理論などで”看護とは何か”を、改めて学ぶなど積極的に履修しています。また、ティーチングアシスタントに挑戦したり、オープンキャンパスを学部生と一緒に盛り上げたり、学内で開催される学会のお手伝いをするなど、今まで経験したことのない機会を逃さないようにしています。学校行事に参加することで、臨床実践では見えなかった教育的視点に気がつくことができ、自分の人間的成長にとっても役立っています。

院生室では、他領域との交流もあり、皆がどのような学びを深めているかを肌で感じることができています。同期だけではなく、先輩後輩ともディスカッションすることも多く、幅広い世代の考えを聞き自分を振り返る機会にもなっています。またオンライン授業の整備もあり、日本のどこにいても顔を合わせて授業が受けられることで、東京だけではなく地方の話も聞くことができています。

その中でも毎回刺激的で学びが多く充実した時間は、やはり自分の領域のゼミです。自分の研究のことはもちろんですが、最新の知見や、新聞や書籍で話題になっていることなど、幅広い視点での考えを気兼ねなく交わすことができています。また管理学領域は、年に 2 回、合同ゼミという博士を含む在学生の研究進捗を発表できる会があります。会の企画・運営・評価は学生が担い、研究のことだけではなく、事業（プロジェクト）のマネジメントの示唆を得られる機会にもなっています。

このような修士課程で得た学びや出逢い全ては一生の宝物となり、これからの私の支えとなるものです。日赤大学院看護管理学領域、安部陽子教授のもとで学べて本当によかった、と思っています。

日本赤十字看護大学大学院の今後ますますのご発展を祈念しております。